

# 『源氏物語』蜻蛉卷女一の宮を垣間見た場面の検討

— 馬道の方からの薫の視線について —

加藤 伸 江

はじめに

『源氏物語』蜻蛉卷に、女一の宮を薫が垣間見る場面がある。亡き光源氏と紫の上の追善法華八講の後片付けが行われている間、女一の宮は、春の町の西の渡殿に居た。釣殿の方からやって来た薫は、そこで女一の宮を垣間見ることができたのである。釣殿からどういう経路で近づき、どのような視線で女一の宮を垣間見たのか。六条院の建物配置にも関わってくるため、検討したい。

まず、該当箇所本文を掲げる。

〈本文一〉

蓮の花の盛りに、御八講せらる。六条院の御ため、紫の上などみな申し分けつつ、御経、仏など供養せさせたまひて、いかめしく尊くなんありける。五卷の日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた、女房につきつつ参りて、もの見る人多

かりけり。

五日といふ朝座にはてて、御堂の飾り取りさけ、御しつらひ改むるに、北の廂も障子ども放ちたりしかば、みな入り立ちてつくろふほど、西の渡殿に姫宮おはしましけり。もの聞き困じて女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人少ななる夕暮に、大将殿直衣着かへて、今日まかづる僧の中にならずのたまふべきことあるにより、釣殿の方におはしたるに、みなまかでぬれば、池の方に涼みたまひて、人少ななるに、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかり立てて、うちやすむ上局にしたり。ここにやあらむ、人の衣の音すと思して、馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例、さやうの人のゐたるけはひには似ず、はればれしくしつらひたれば、なかなか、几帳どもの立てちがへたるあはひより見通されて、あらはなり。水を物の蓋に置きて割るとて、もて騒ぐ人々、大人三

人ばかり、童とゐたり。唐衣も汗衫も着ず、みなうちとけたれば、御前とは見たまはぬに、白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、かくあらそふをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。いと暑さのたへがたき日なれば、こちたき御髪、苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたになびかして引かれたるほど、たとへんものなし。こころよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりとおぼゆ。

(蜻蛉・⑥二四七〜二四九)<sup>1</sup>

## 一、女一の宮を垣間見た場面についての先行研究

この場面に語られる馬道について、先行研究の注釈書と論考の見解を掲げる。

①『日本古典文学大系』<sup>2</sup>

(薫は涼んだ後、西の渡殿の方を振り向くと) 中門の所の切馬道のそばの部屋の襖が。小宰相の上局は、切馬道に近い方なのである。

②『源氏物語評釈』<sup>3</sup>

切馬道のこと。殿内に設けてある通路。

③『日本古典文学全集』<sup>4</sup>

殿舎内に設けられた板敷の通路。中門のそばの切馬道であろう。

④『新潮日本古典集成』<sup>5</sup>

馬道の方の襖。「馬道」は、建物の中央を貫通する廊下。ここは、西の対を南北に仕切る馬道か。

⑤『新日本古典文学大系』<sup>6</sup>

西の対の馬道に面した側の、渡殿の襖障子。「馬道」は建物内を貫く通路。

⑥『新編日本古典文学全集』<sup>7</sup>

殿舎内に設けられた板敷きの通路。ここは中門のそばの切馬道か。

⑦池浩三氏「六条院想定平面図」<sup>8</sup>

文の脈絡やや明確を欠くが、「釣殿」は西の釣殿、「馬道」は常には厚板を架け渡して廊のごとく通行し、必要ある時はこれを取りはずして馬を引き入れる切馬道で、西の中門のそばにあるのである。その方向の障子の間からどのような視線で見たのかはつきりしないが、それはともかくとして、本文の状況設定だと、僧侶たちは西門から退出したことになる。

⑧倉田実氏『源氏物語』の障子―寝殿造の屏障具―<sup>9</sup>

薫が生絹姿で氷を手にした女一の宮を覗き見る段である。「馬道」の場所に諸説あるが、後に薫は、女一の宮を覗き見た「ありし渡殿も慰めに見むかし」と思っているのが、馬道は渡殿内部にあったことなる。壁渡殿に休む女一の宮を、薫は馬道にいてたまたま開いていた障子から見る事ができたのである。先行研究では馬道について、「切馬道」説や「建物内を貫く通路」

説がある。池浩三氏は、「どのような視線で見たのかはつきりしない」とし、「切馬道」だとされている。倉田実氏は、「馬道」の場所に「諸説ある」とし、「馬道は渡殿内部にあったことになろう」とされている。

馬道の実態について明確にされておらず、女一の宮を垣間見た薫が、どこにいてどのような視点であったのかが判然としない。そこで、現存する馬道を参考にしながら、女一の宮を垣間見た馬道の構造を想定したい。

## 二、馬道について

蜻蛉巻のこの場面以外に、馬道が描かれている本文を掲げる。

〈本文二〉

参上りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋、渡殿のここの道にあやしきわざをしつつ、御送り迎へへの人の衣の裾たへがたくまざなきこともあり、また、ある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。 (桐壺・①二〇)

桐壺から清涼殿までの道中に、馬道があり、その戸を両側から閉めたのである。桐壺更衣は屋外に閉めだされたことになる。

〈本文三〉

承香殿の東面に御局したり。西に宮の女御はおはしければ、

「馬道ばかりの隔てなるに、御心の中ははるかに隔たりけんかし。

(真木柱・③三八二)

玉鬘尚侍の東面に局があり、式部卿宮の女御が西面におり、その間に馬道がある。『源氏物語』本文には、蜻蛉巻のほかに二ヶ所に記述があるが、いずれも宮中の馬道である。

馬道とは、「平安時代の住宅建築において、殿舎の中央部を梁行きの方向に貫通して設けた通路。殿舎内のもは板敷きであるが、廊などに設けたものは土間」(『角川古語大辞典』<sup>10</sup>)だと説明されている。しかし、この説明のみでは具体的な構造が理解できないため、実在の古建築を参考にしたい。「国宝 石上神宮撰社出雲建雄神社拝殿」を見る(「写真1」)。文化庁監修『国宝』十五 建造物<sup>11</sup>には、次の説明がある。

瀟洒で軽快な意匠の拝殿で、横長の建物の中央一間を馬道(土間の通路)とした割拝殿である。(中略)すべて角柱で側面は、板扉、他はすべて引違いの格子戸とする。(中略)割拝殿の遺構としてはもっとも古い。

ほか、「国宝 桜井神社拝殿(堺市)」、「国宝 大崎八幡宮(仙台)」重要文化財 東大寺二月堂参籠所」などに馬道がある。「写真1」を見ると、建物の中を外から通り抜けることのできる土間がある。この土間が馬道と呼ばれる。蜻蛉巻の西の渡殿には、「馬道の方の障子」があったと描かれているので、「国宝 石上神宮撰社出雲建

雄神社拜殿」では格子戸になっている所が障子となっていたのではないだろうか。障子については、倉田実氏が、「平安朝において狭義には、今日の襖に相当するものを指す」と、定義しておられる。蜻蛉巻で描かれる西の渡殿の馬道は、「国宝 石上神宮撰社出雲雄神社拜殿」のような構造だったのではないか。しかし、先行研究の多くは、「切馬道」であったとしている。蜻蛉巻本文には、「馬道」と書かれているにも関わらず、「切馬道」説が唱えられているのはなぜだろうか。馬道の構造では不都合があるというのだろうか。

『日本国語大辞典』において、切馬道とは「殿舎をつなぐ廊の板敷を切り離して取り外せるようにし、必要に応じて内庭に馬などを引き入れやすくした所」と説明され、『信貴山縁起』の切馬道の箇所を指し示している。この箇所を『内裡図』〔図1〕に見ると、「キリメドウ」と書かれており、そこに長橋があることが分かる。切馬道は、ほかに弘徽殿と登華殿の間と、麗景殿と宣耀殿の間に書かれている。ところで、『枕草子』第一〇〇段に、「ほとほとうち橋よりも落ちぬべし。」<sup>14</sup>という本文がある。定子の妹原子が東宮に入内する折、「登華殿の東の廂の二間に、御しつらひはしたり。」<sup>15</sup>とあり、東宮へ上るために登華殿の東の廂の二間に入ったのである。原子が東宮へ上ったあと、定子が清涼殿へ上る時、道隆の語る冗談のせいで女房たちが打橋から落ちそうになったというのである。登華殿から弘徽殿の間には打橋があり、その一部を取り外せるようにしたの

が切馬道と呼ばれていたのだろう。切馬道は中門のそばにある。中門から建物に上がることなく、地面を移動する場合のために取り外せるようにしていたのが切馬道なのである。

一方、『内裡図』の他の場所を見ると、馬道も存在する。〈本文三〉に掲げた承香殿に馬道の位置が書かれており、玉鬘尚侍と式部卿宮の女御の局に隔たりがあったことが分かる。その他の場所にも馬道が書かれている。〈本文二〉に掲げた桐壺更衣が清涼殿に上る経路については検討が必要だが、道中馬道を通らざるをえなかった状況が見える。

このように、馬道と切馬道は異なるものである。馬道は、殿舎の中央部に貫通して設けた通路であり、切馬道は、殿舎をつなぐ長橋などに設けた取り外し可能な通路なのである。本文に馬道と書いてあるにも関わらず、切馬道であるという説が多かったのは、『枕草子』第一〇〇段や『信貴山縁起』の影響を受けたからであろうか。不明である。寝殿と西の対をつなぐ機能を持つ渡殿に、切馬道がどのように設置されるのだろうか。蜻蛉巻の馬道は、西の渡殿を貫通する通路であり土間であると考えられる。設置場所については、後述する。

### 三、女一の宮の居所について

次に、女一の宮の居所について考えてみたい。〈本文一〉に掲げた法華八講の片付けの場面では、女一の宮は春の町の西の渡殿に居

る。しかし、元來女一の宮は、春の町の東の対の住人である。それは次の本文に示されている。

〈本文四〉

女一の宮は、六条院南の町の東の対を、その世の御しつらひあらためずおはしまして、朝夕に恋ひしのびきこえたまふ。

(匂兵部卿・⑤一八)

紫の上に養育された女一の宮は、紫の上亡き後も室内のありさまをそのままにして、紫の上を偲び暮らしているという。しかし、蜻蛉巻の法華八講の後片づけの時、女一の宮が西の渡殿に居たことにより、宮川葉子氏は、女一の宮の居所が春の町の東の対から読者に無断で春の町の寝殿西面へ移ったのではないかと解釈されている。

少なくとも匂宮巻で述べられていた東の対ではなさそうである。もし東の対に住むのなら、寝殿での御八講の後片づけを待つ間に、西の渡殿に移っている必要はないわけで、さっさと東の対へ引きあげればよいことになる。恐らく「寝殿をかたづける間だけ、女一宮を西の渡殿に移した」(二三七頁 頭注一七)とするのから察せられるように、女一宮は寝殿に住まう者として設定されているのであろう。更に女一宮は、寝殿西面の住人とされていたと思われる。

匂兵部卿巻に書かれた春の町東の対から、蜻蛉巻では西の対に移っているというのである。「西の渡殿に」の箇所は、どう記

述されているのだろうか。以下、先行の注釈書を掲げる。

①『日本古典文学大系』

釣殿と西の対の間の西の渡り廊に、女一の宮(匂宮の姉)は御ありなされるのであったっけ。

②『源氏物語評釈』

寝殿を整頓する間、一時、女一の宮は西の渡殿にいたのである。

③『日本古典文学全集』

寝殿をかたづける間だけ、女一の宮を西の渡殿に移した。

④『新潮日本古典集成』

寝殿と西の対の間の渡殿。寝殿を片付ける間、一時、女一の宮をお移している。

⑤『新日本古典文学大系』

寝殿と西の対をつなぐ建物。女一の宮は移っておられるのだった。

⑥『新編日本古典文学全集』

寝殿をかたづける間だけ、女一の宮を西の渡殿に移した。

女一の宮が西の渡殿に居た、この場面の注記では女一の宮の居所を特定できるものはなかった。また、「西の渡殿」についての本文異同は確認できなかった。では、源氏亡き後の六条院の住人は誰になっているか、確認しておきたい。まず、匂宮の兄である二の宮についての記述である。

〈本文五〉

二の宮も、同じ殿の寢殿を時々の御休み所にしたまひて、梅壺を御曹司にしたまひて、右の大殿の中姫君を得たてまつりたまへり。

(匂兵部卿・⑤一八)

六条院春の町の寢殿は、二の宮の御休み所である。そのほか、源氏の生前に六条院に住んでいた人々は、どこに住んでいるだろうか。

〈本文六〉

さまざま集ひたまへりし御方々、泣く泣くつひにおはすべき住み処どもに、みなおのおの移ろひたまひしに、花散里と聞こえしは、東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける。入道の宮は、三条宮におはします。今後は内裏にのみさぶらひたまへば、院の内さびしく人少なになりにけるを、右大臣、「人の上にて、いにしへの例を見聞くにも、生ける限りの世に、心をとどめて造り占めたる人の家居のなごりなくうち棄てられて、世のならひも常なく見ゆるは、いとあはれに、はかなき知らるるを、わが世にあらん限りだに、この院荒らさず、ほとりの大路など人影離れはつまじう」と思ひのたまはせて、丑寅の町に、かの一条宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごと

に十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。

(匂兵部卿・⑤一九―二〇)

六条院夏の町には、落葉の宮が住む。花散里は二条東院に、女三

の宮は三条の宮に移っている。落葉の宮が住む夏の町には、夕霧の六の君が養女として住むことになる。それは次の本文に示されている。

〈本文七〉

やむごとなきよりも、典侍腹の六の君とか、いとすぐれてをかしげに、心ばへなども足らひて生ひ出でたまふを、世のおぼえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心苦しう思して、一条宮の、さるあつかひくさ持たまへらでさうざうしきに、迎へとりて奉りたまへり。

(匂兵部卿・⑤三二)

落葉の宮の養女となった六の君が居る六条院夏の町に、のち匂宮が通うことになる。次に、匂宮の居所についての本文を掲げる。

〈本文八〉

紫の上の御心寄せことにはぐくみきこえたまひしゆゑ、三の宮は二条院におはします。春宮をば、さるやむごとなきものにおきたてまつりたまて、帝、后いみじうかなしうしたてまつり、かしづききこえさせたまふ宮なれば、内裏住みをせさせたまつりたまへど、なほ心やすき古里に住みよくしたまふなりけり。

(匂兵部卿・⑤一七―一八)

匂宮には内裏に部屋が用意されているが、古里の二条院に居ることが多いと言う。二の宮は、梅壺に曹司があり、六条院の寢殿が御休み所だと語られている。二の宮の北の方、夕霧の中姫君は、どこに住んでいたのだろうか。雲居雁のいる三条宮であろうか。二の

宮が御休み所としている六条院春の町の寝殿に住んでいた可能性もあるだろうか。

このように、源氏亡きあとの六条院の住人について整理してみた。宮川氏が述べられるように、女一の宮が春の町の寝殿に居を移したということがあり得るだろうか。六条院春の町の寝殿は、明石の中宮が内裏から退出された際の里であり、二の宮の御休み所となっている。常に住む人がいなくても、この二人のために空けておく必要があるのではないか。仮に、女一の宮が寝殿に移ったとして、東の対が空く。東の対に誰が住むと考えるのだろうか。紫の上に育てられた女一の宮以外に、東の対に住むにふさわしい人がいるだろうか。

宮川氏は、女一の宮が東の対から寝殿に移ったとされている。一方で、女一の宮が西の対に住むことはないと思われている。

女一宮の居所は西の対とも考えられそうであるが、①女三宮降嫁の折、西の一の対、二の対及び西の渡殿は女房の局として使われていたこと（若菜上 五五頁）、②女一宮に出仕する式部卿宮の姫君は、「この西の対にぞ御方したりける」（蜻蛉二六二頁）とあり、上臈とはいえ女房と同じ対屋に一品の姫君が住むとは思えないこと、など勘案すると、西の対は皇女一品宮の居所にふさわしくない。

六条院西の対については、女三の宮が降嫁した折に語られる。

#### 〈本文九〉

かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。この院にも、御心まうけ世の常ならず。若菜まのりし西の放出に、御帳立てて、そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。

（若菜上・④六一〜六二）

源氏の正妻、女三の宮降嫁の折、西の対は女房の局として使用されていたことが分かる。蜻蛉巻において、宮の君が西の対に住むことになる。西の対は、東の対より格下の奥向きの建物なのだろう。よって、春の町の西の対には女一の宮が住むことはないという宮川氏の説には賛同できる。

春の町は、寝殿が明石の中宮の里邸と二の宮の御休み所であり、東の対が女一の宮の居所であり、西の対が女房の局である。身分を考えると、それぞれが適当な場に収まっていると思われる。女一の宮は、法華八講の片付けの時だけ仮に西の渡殿に居たと考える。

このほか、女一の宮が西の渡殿に居たという記述から、先行研究⑦に掲げた池氏は、「僧侶たちは西門から退出した」と捉えられている。しかし、薫が僧に会いに赴いたのは釣殿と書かれ、西の釣殿とは書かれていない。東の釣殿であったほうが僧の退出経路として無理がなからう。藤裏葉巻で帝の行幸があった東面は、大路に面しているはずだし、西側は秋好中宮の町がある。六条院の外に出る西

門が春の町にあったとは考えられない。

#### 四、法華八講の場としての六条院春の町

ではなぜ、春の町東の対に住む女一の宮が、蜻蛉巻では仮にでも西の渡殿に居たのだろうか。『細流抄』<sup>18</sup>は、次の注を記す。

「きたのひさし」寝殿の北面也東は道場になるゆへに西にうつり給ふ也

東側は道場になっていたために、西に移っていたのだという注記である。法華八講が行われる六条院春の町の会場設営は、普段と異なるのだろうか。『源氏物語』に描かれる法華八講の本文を掲げる。

〈本文十〉

十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせたまふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙篋の飾りも、世になきさまにととのへさせたまへり。さらぬことなきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。仏の御飾り、花机の覆ひなどまで、まことの極楽思ひやらる。初の日は先帝の御料、次の日は母後の御ため、またの日は院の御料、五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参りたまへり。今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、薪こるほどよりうちはじめ、同じういふ言の葉も、いみじう尊し。親王たちもさまざまの捧物さ

上げてめぐりたまふに、大將殿の御用意などは似るものなし。常に同じことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めぐらしからむをばいかがはせむ。

最終の日、わが御事を結願にて、世を背きたまふよし仏に申させたまふに、みな人々驚きたまひぬ。

（賢木・②二九〜一三〇）

藤壺の宮主催の法華八講である。最終日に藤壺の宮自身が出家し、源氏は嘆く。新編全集一三〇頁の頭注六に「薪の行道と呼ばれる儀式。行基作と伝えられる「法華経をわが得しことは薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」（拾遺・哀傷）を歌いながら、捧げ物をしたり薪を背負ったり水桶を持ちたりして行道する。」とある。親王たちも行道している。賢木巻での藤壺の法華八講は、江戸時代（十七世紀）の『伝土佐光起 源氏物語絵巻』<sup>19</sup>に描かれている。法華八講の場として、寝殿ほぼ全てを使用しているように見える。

ほかに、須磨・明石から帰京した源氏が、亡き父桐壺院のため、法華八講を催す場面がある。

〈本文十一〉

さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御事を心にかけてこえたまひて、いかでかの沈みたまふらん罪救ひたてまつることをせむと思し嘆きけるを、かく帰りたまひては、その御いそぎしたまふ。神無月に御八講したまふ。世の人なびぎ仕うまつ

ること昔のやうなり。

(落標・②二七九)

蜻蛉巻に描かれる法華八講では、「五巻の日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた、女房につきつつ参りて、もの見る人多かりけり」(蜻蛉・⑥二四七)とあり、六条院の身内の女房だけでなく、その縁を頼って、普段出入りすることのない人々まで訪れたのだと語られる。五巻の日は特に、大路に面した門のある東の対に、女一の宮の座を置けなかったのかもしれない。ゆえに、本来は東の対に住む女一の宮が緊急避難的に西の渡殿に移って居たのではないだろうか。

## 五、薫のたどった経路

それでは、薫は女一の宮をどのように垣間見たのか検討したい。この場面を順に追っていく。法華八講のあと薫は直衣に着替える。この着替えた場所は、東の対であったかもしれない。今日来ている僧に言っておきたいことがあったので、釣殿のほうに行くが、すでに僧は退出したあとだったので、薫は池で涼む。そして、薫と歌を交わした宰相の君の上局の辺りにやって来るのである。薫が馬道から中を覗くと、宰相の君ではなく女一の宮がそこに居たのである。馬道は、建物に上らなくても行き来できるように通された土間の通路である。春の町には西の対・二対とあり、建物が込みあっている。庭から裏側に廻る通路が必要である。つまり、薫は土間であ

る馬道から建物内の女一の宮を見ているという構図が正確なのではないか。

『源氏物語手鑑』蜻蛉一「写真2」を例に掲げると、この場面に馬道が描かれておらず、建物内に立っている薫が女一の宮を見る構図となっている。また、『日本古典文学大系』などに注で掲げられているように切馬道であった場合は、打橋を通して薫がやって来たと捉えるのだろうか。打橋は、殿舎と同じ高さで、建物内を移動するのに使用される。薫は、池で涼んだのち法華八講の場であった後片付け中の寝殿を再び通ることになる。薫は、次の本文に示すように、芳香が身に備わった人である。

〈本文十一二〉

香のかうばしさぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。(匂兵部卿・⑤二三)

薫が建物内を行き来していたら、他の女房たちに呼び止められてしまうのではないか。この薫の移動は、建物内ではなく庭を歩いたのであろう。本文に描かれる馬道の記述から解釈すると、薫は女一の宮を外から垣間見ていることになるのだと思われる。

薫が庭の側から女一の宮を垣間見た西の渡殿は、どこか。「北の廂も障子ども放ちたりしかば」(蜻蛉・⑥二四七)とあるので、女一の宮は、法華八講の最中、寝殿の北廂に居て列席していたのだら

う。その寝殿の北廂に近い、西の対につながる渡殿に居たと考えた。寝殿と対の間の渡殿は、東三条殿の復原図（川本重雄氏『寝殿造の空間と儀式』<sup>20</sup>）によると、透渡殿と渡殿の二つの構造物がある。透渡殿を反橋と考える。源氏と女君達が新築した六条院に移って間もなくの頃、秋の町から春の町へ、女童が紅葉を運んで来たことがある。「廊、渡殿の反橋を渡りて参る。」（少女・③八一〜八二）という本文から、秋の町から春の町の寝殿の間に、反橋があることが分かる。反橋の下は通ることができると捉える。池からやって来た薫は、反橋の下をくぐり、女一の宮の居る西の渡殿にたどり着くという経路が考えられる。

### おわりに

以上、馬道について検討することにより、女一の宮を見る薫の視線が確認できた。女一の宮と薫は、同じ高さにいない。一品の宮である女一の宮と、薫の身分の隔たりが描かれている。さらに、馬道が、建物の込みあう春の町に必要だということも推測された。女房の局がある西の対とは、馬道で区切られていたのではないか。馬道と切馬道は異なるものである。本文に馬道と書かれているので、西の渡殿には馬道があったと捉える。馬道は、蜻蛉巻の本文に書かれているにも関わらず、先行図において場所が示されたことはなかった。六条院想定配置図私案に、春の町の寝殿と西の対の間の渡殿に

馬道を設けることとする〔図2〕。

### 注

- (1) 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①〜⑥』（小学館、一九九四〜一九九八年）により、巻名、頁数を示す。私に傍線および枠線を付し、振り仮名を省略した。以下同じ。
- (2) 山岸徳平氏校注『日本古典文学大系 源氏物語五』（岩波書店、一九六三年）。
- (3) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈十二』（角川書店、一九六八年）。
- (4) 阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『日本古典文学全集 源氏物語⑥』（小学館、一九七六年）。
- (5) 石田穰二氏・清水好子氏校注『新潮日本古典集成 源氏物語八』（新潮社、一九八五年）。
- (6) 柳井滋氏・室伏信助氏ほか校注『新日本古典文学大系 源氏物語五』（岩波書店、一九九七年）。
- (7) 注(1)に既出。『新編日本古典文学全集⑥』（小学館、一九九八年）。
- (8) 池浩三氏「六条院想定平面図」『源氏物語の地理』思文閣出版、一九九九年。
- (9) 倉田実氏『源氏物語』の障子・寝殿造の屏障具―（森一郎氏・岩佐美代子氏・坂本共展氏編『源氏物語の展望 第八輯』三弥井書店、二〇一〇年）。
- (10) 中村幸彦氏・岡見政雄氏・阪倉篤義氏編『角川古語大辞典』（角川書店、一九九九年）。
- (11) 文化庁監修『国宝』十五 建造物三（毎日新聞社、一九八四年）。

(12) 注(9)に既出。

(13) 日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典第二版』(小学館、二〇〇〇年)。小松茂美氏編『日本絵巻大成 信貴山縁起』(中央公論社、一九七七年)も参照されたい。

(14) 松尾聰氏・永井和子氏校注・訳『新編日本古典文学全集 枕草子』(小学館、一九九七年)二〇八頁。

(15) 注(14)所掲書一九九頁。

(16) 宮川葉子氏「女一宮の物語―匂宮巻と蜻蛉巻の関連において―」(『解釈』一九九二年二月号)、『源氏物語』の本文を『日本古典文学全集』から引用されている。

(17) 注(16)に既出。

(18) 伊井春樹氏編『内閣文庫本細流抄』(桜楓社、一九七八年)。

(19) Saifert, René, 佐野みづら氏『Le dit du Genji』(Diane de Salles, 1100〇七年)、小嶋菜温子氏・小峯和明氏・渡辺憲司氏編『源氏物語と江戸文化』(森話社、二〇〇八年)、三田村雅子氏・芸術新潮編集部編『天皇になれなかった皇子のものがたり』(新潮社、二〇〇八年)などに収録。

(20) 川本重雄氏『寝殿造の空間と儀式』(中央公論美術出版、二〇一二年)。

〔写真1〕文化庁監修『国宝』十五 建造物三(毎日新聞社、一九八四年)。

転載許可を下された文化庁伝統文化課殿に感謝申し上げます。

〔写真2〕重要文化財『源氏物語手鑑』蜻蛉一 土佐光吉筆 和泉市久保惣美術館所蔵。転載許可を下された和泉市久保惣美術館殿に感謝申し上げます。

〔図1〕故実叢書編集部編『改訂増補 故実叢書 大内裏図・中古京師内外地 図他』(明治図書出版、改訂増補版刊行年一九九三年)。転載許可を下さ

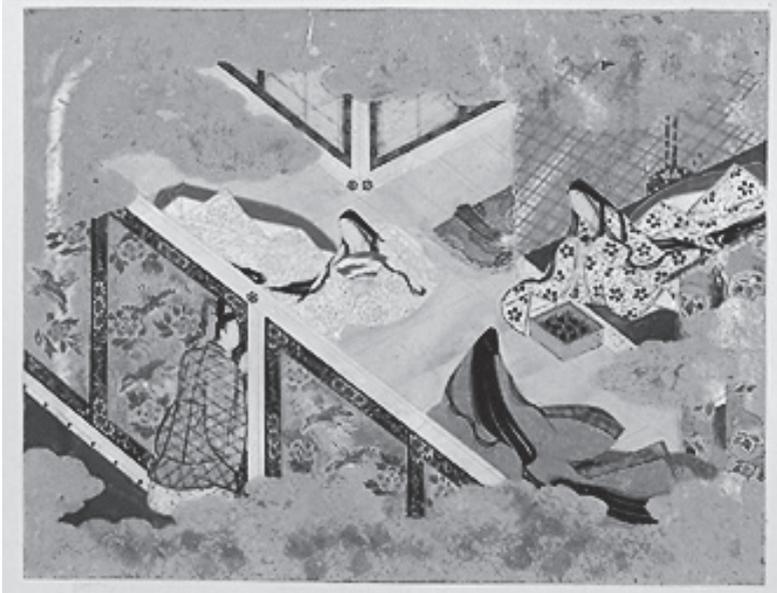
た明治図書出版殿に感謝申し上げます。

〔図2〕六条院春の町想定配置図私案に、蕉のたどった経路を示す。

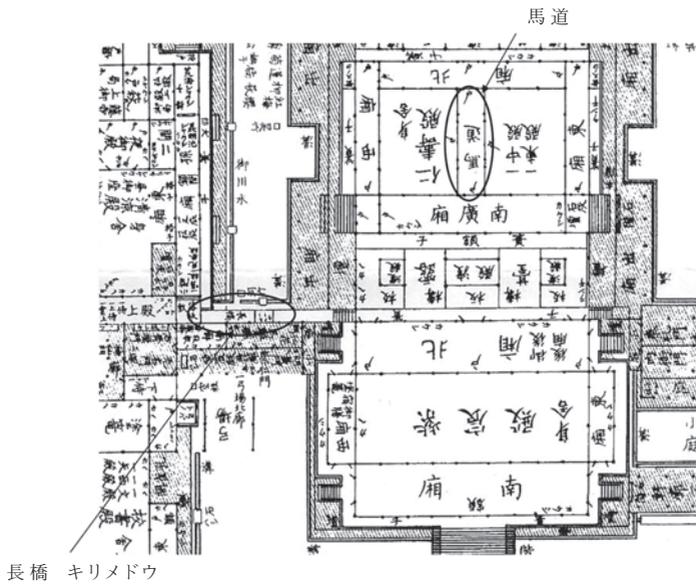
―かとう・のぶえ、広島大学大学院博士課程後期在学―



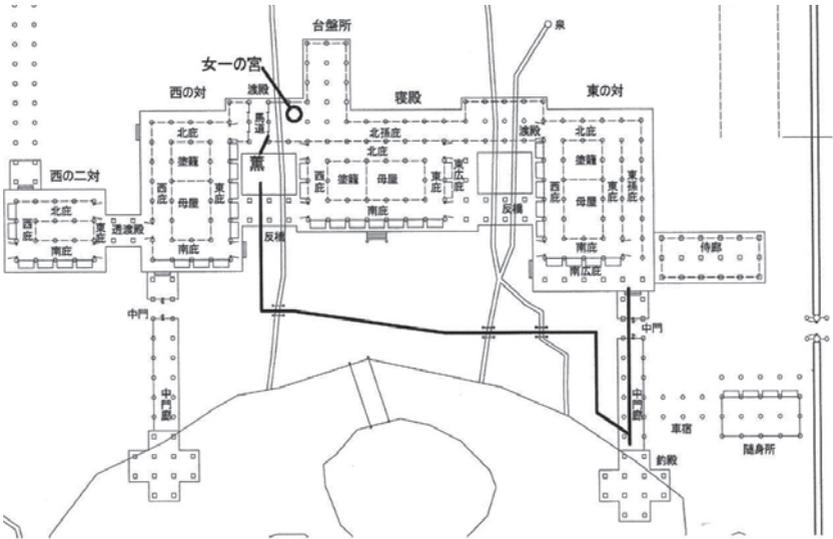
〔写真1〕 国宝 石上神宮摂社出雲建雄神社拝殿



〔写真2〕土佐光吉筆 重要文化財「源氏物語手鑑」蜻蛉一 和泉市久保惣美術館所蔵



〔図1〕「内裡図」(該当箇所を示す。)



〔図2〕六条院春の町想定配置図私案（蕉のたどった経路を示す。）